ある転結（てんけつ）

赤羽　つる子

永き日の労の証の節々と曲がりゆく指恨まず生きん

リウマチの足暖めよと足温器求めてくれし長男の嫁

癌細胞そこに無きこと希（ねが）いつつ食い入るごとくモニターを見る

肺癌を告げられ動ぜざる夫（つま）とただ聞くのみに立ちつくす吾（われ）

病む夫にこぼさずまいと足庇（かば）い昼食運ぶリウマチの吾

着替え洗髪厭わずなしてくれし夫を今は看取（みと）る身リウマチの吾が

肺癌と肺気腫病める夫の身にペースメーカーも同居しており

肺病みの臥床の夫は苦しみて酸素四リットルで命をつなぐ

濡れし夜着取り替え済めば寝息立てことなき如き午前三時に

日に幾度この病廊を往き来せしや夫の介護も今日で終わりぬ